

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。  
このシリーズは今号が最終回。  
次号からは別の筆者による連載が始まります。

# 綺麗なハルモニ

なかみ  
中上紀

作家

一 昨年の夏、韓国を旅行中に交通事故に遭い、救急車で大きな病院に搬送された。腰部を三箇所も骨折していたため、一ヶ月の入院である。その病院では当初、個室が空いておらず、三人部屋に入れられたのだが、これがとんでもない部屋だった。

というのも、本来の入院患者の他に家族の付き添い人や見舞い客やらが常におり、昼はせわしなく出入りするだけでなく、大声での会話、夜ともなれば泊まり込んで高軒をかいて寝るのである。

こんなところで生活するのとか、目の前が真っ暗になった。しかし、言葉も通じず、そもそも腰から下がまったく動かず寝たきり状態だ

った私は黙って与えられた環境に甘んじる以外、なすすべもない。

奇妙な日々が始まった。しかし、今考えてみると、思ったほど悲惨だったわけでもない。二人居る患者のうちの一人が、腕を骨折して入院している、鼻の横に大きなほくろのあるハルモニ（おばあさん）で、日本語が少しだけ話せて、お菓子や飲み物をくれたり、何かと気にかけてくれた。

ある朝ハルモニのところにも初老の男の人がやってきた。また見舞い客かとうんざりしたが、男の人は彼女に向かっけいきなりお祈りをはじめた。どうやら牧師らしい。それが終わると、なぜか牧師は私のほうを向いて同じことをする。

ハルモニが横で神妙に見守っていた。この娘にも祈ってやってくれ、異国で骨折してしまった哀れな日本人なのだ、彼女が頼んだのだらう。もう大丈夫だよ、きつと良くなるよ、とハルモニは言った。

また別の日、部屋に戻ってきたハルモニが私のベッドのところに来てニコニコしている。はっと気づいた。鼻の横にあった大きなほくろが消えている。どう、綺麗かい？ 彼女は訊いた。骨折の治療のついでに美容整形、といったところか。私は口をあんぐりあけたままうなずくだけだった。綺麗になった彼女は、翌日退院していた。私が待望の個室に移ったのは、そのさらに翌日のことである。☺